

プロフィール

氏名 野中 秀昭
年齢 33歳
職業 看護師
資格取得 平成4年
平成4年日赤入社



男女共同参画社会
今を知るレポート Vol.3

男女で共に支えあう メンタルケア

どうして看護師になろうと思ったのですか？

仕事には色々ありますが、私は子どものころから奉仕職につきたいと考えていました。憧れは消防署の救急隊員でした。高卒のとき資格試験で眼鏡をかけていたらダメだということで諦めましたが、やはり人の役に立つ仕事がしたいと21歳で転職、22歳で開業医に看護助手として働きながら看護学校へ通いました。これから迎える高齢社会の中でもこの資格を持っていれば、人の役にたてる、自分や家族のためにもなる、人のために尽くせるということで、生涯を通して活かせるライセンスの一つとして看護師を選びました。

以前から看護師は多かったですか？

看護師は少なかったです。僕が学校に通っていたときは3クラスで男性は11名でした。全員看護師になりました。今は県立看護科学大学、厚生学院があり男性も多いようです。

看護師として仕事をしていく上で抵抗はありませんか？

ここでは看護師は私一人ですが、私自身抵抗は無いですね。男女雇用機会均等法では男女差別をしてはいけなく、看護婦も看護師も同じライセンスを持っているので仕事の上では対等ですが、若い女性や思春期の男性の検査、手術後の清拭や尿管に管を入れるとき、外科でいえば乳房の診断など患者さんの気持ちになって、気を配ってそこだけ看護婦さんに替わったり僕がしたりします。しかし、緊急を要する場合は男性、女性を問わず処置に当たります。人の心を思いやる上でも男性と女性が同じ職種にいた方が患者さんの心情が理解でき、よりよい看護ができると思います。

家族や周囲の反応はどうですか？

妻も看護婦で共働きです。子どもは3人いて僕の両親が世話をしてくれています。この職業を選ぶにあたって、先輩の方で「そんな女みたいな仕事するな」という人もいました。家族の反対はなかったです。両親は看護師として仕事が続くのかという不安はあったようですが、自分が選ぶ道なので自分が好きな事をしないと長続きしないと思ったようです。特に僕は好きなこととなると常に熱中してとびこえるくらいするんです。



信条としていることがありますか？

私はちょっとしたことで、自分の出来ることで相手が助かるように、いつでも自分のできる範囲でベストを尽くしたいと思っています。

将来の夢や後輩に望む事

事故現場では救急救命士の活躍があり、病院へ運ばれ救急患者への対応が行われます。それぞれの連携で、よりよい方向へ進みます。個人的には救急研修などしていますが、さらに医療に携わる人や住民の意識が高揚できる研修の場や啓蒙活動が進むことを望んでいます。後に続く人達には、解らないこと、解ることの意志表示をしっかりと、次に実行して頂きたいです。1分1秒を争う現場では、相手に通じるはっきりとした話し方をして頂きたいです。

男女共同参画社会について

職選びのとき男だから、女だからという意識はありませんでした。今は男女関係なく色々な道が開けてきたので家庭でも職場でもどちらかがサポートし、お互いに助け合いながら進めていくと問題は起こらないのではないのでしょうか。

看護師について

看護師とは…

昭和43年6月「保健婦助産婦看護婦法」の改正に伴い看護師と呼ばれるようになる。現在、日本では約4万人程度（準看護師含む）。仕事内容は看護婦と同じ。看護師の歴史は精神科医療とともにあり、その時代の社会的要請により、その役を担われてきた。

引用文献：「看護師をめぐる現状と課題」（浅川明子著）「看護師成立の歴史的状況」（矢野典二著）